

甲南大学 総合研究所報

甲南大学総合研究所

〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1

電話 (078) 435-2754(ダイヤルイン)

第 73 回 総合研究所公開講演会

「ポスト・コロナの博物館運営」

講 師 小野田 一幸 (神戸市立博物館学芸課長・学芸員)
亀田 佳代子 (滋賀県立琵琶湖博物館上席総括学芸員)
島 敦彦 (国立国際美術館館長)
進 行 服部 正 (甲南大学・文学部教授)
指定討論者 今井 博之 (甲南大学・理工学部長)
西 欣也 (甲南大学・文学部長)

2021 年 10 月 2 日 (土) 14:00~16:30



開学70周年記念 シンポジウム

ポスト・コロナの 博物館運営

開 学 7 0 周 年 記 念 シ ン ポ ジ ウ ム

「ポスト・コロナの博物館運営」

開催日時

2021年10月2日[土]

14:00～16:30

◆ 登壇者（敬称略、50音順）

- ・ 小野田一幸（神戸市立博物館学芸課長・学芸員）
- ・ 亀田佳代子（滋賀県立琵琶湖博物館上席総括学芸員）
- ・ 島敦彦（国立国際美術館館長）
- ＊ 進行：服部正（甲南大学文学部教授）
- ＊ 指定討論者：今井博之（甲南大学理工学部長）
- 西欣也（甲南大学文学部長）

第73回甲南大学総合研究所 公開講演会のご案内

2021年9月吉日

甲南大学総合研究所
所長 村嶋 貴之

各位

拝啓 秋暑の候、時下ますますご清栄の段、
お慶び申し上げます。平素は格別のご高配を
賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、第73回公開講演会は、甲南大学開学
70周年を記念してシンポジウム「ポスト・
コロナの博物館運営」を開催いたします。
参加無料です。事前にお申し込みのうえ、
ご参加ください。

詳細と参加申し込み方法につきましては総合

研究所ホームページ（<https://www.konan-u.ac.jp/souken/>）よりご確認をお願いいたします。

皆様のお申し込みをお待ちしております。

敬具



服 部 皆さん、こんにちは。定刻になりましたので、甲南大学開学 70 周年記念シンポジウム、ポスト・コロナの博物館運営を始めさせていただきます。

初めにお断りですが、会場内、大学の広報部が写真撮影をさせていただいております。また、新聞社の取材が入る予定もありまして、写真撮影などをさせていただくことになります。あらかじめ御了承いただき、もし後ろ姿など写ったら不都合があるという方がおられましたら、受付にお申しつけください。よろしくお願いします。



では初めに、文学部長の西から御挨拶申し上げます。

西 皆様、こんにちは。本日はシンポジウム「ポスト・コロナの博物館運営」によろしくお越しいただきました。このシンポジウムは、甲南大学開学 70 周年を祝うイベントの一つとして開催されるものです。

今からちょうど 70 年前の 1951 年に、甲南大学は文理学部一学部で発足いたしました。文理学部は、文学科と理学科からなる、今の言葉で言えば「文理融合的な」学部ということになるかと思います。その翌年には経済学部がスタートしまして、さらに 5 年後には文学部、それから理学部がそれぞれ独立するという流れの中で、人文、自然、社会、それぞれの部門からなる総合的な大学へと発展してまいりました。

本日のシンポジウムは、博物館運営をテーマとしておりまして、歴史系と美術系、そして自然史系という 3 つの分野でそれぞれに活躍されている先生方にパネリストとしてお越しいただきました。開学から 70 周年を迎えて、このような形で再び文系と理系が学問の分野の垣根を超えるような形で一つのテーマについて共に考える機会を持てるということは、本当に意義深いことと感じております。

それからこれは少し内輪のお話になりますけれども、文学部長を務めています私と、理工学部長の今井博之先生、そして司会進行をされている服部正先生は、歴史文化学科の先生方と共に本学博物館学芸員養成課程のスタッフとして、これまで共に働いてきた仲間でもあります。したがって本日は肩書のことは忘れて私たちも率直に意見を交換させていただき、たくさんのことを学びたいと考えております。

さて、コロナが発生してからの 2 年間、世界は様々な問題を突きつけられてきました。医療はもちろん、政治、経済、教育など、あらゆる面での困難がありました。そのような中で「文化活動」が人間社会にとって持つ意味についても深く考えさせられた 2 年間であったと思います。この間、博物館を支えてこられた 3 名の先生方からお話を伺って、今後のミュージアムのあり方について、共に認識を深めるよい機会になればと思います。以上をもちまして御挨拶とさせていただきます。

服 部 ありがとうございます。

では、登壇者の先生方をお招きしたいと思います。

こちらから、国立国際美術館館長、島敦彦さんです。

続きまして、滋賀県立琵琶湖博物館上席総括学芸員、亀田佳代子さんです。

神戸市立博物館学芸課長、小野田一幸さんです。

先生方の経歴につきましては、お配りしたお手元のチラシの裏面に書かれておりますので、そちらを御参考いただくことにして、早速議論に入っていきたいと思います。

私は、司会進行を務めさせていただきます、甲南大学文学部の服部です。よろしくお願いいたします。

昨年の春の最初の緊急事態宣言以降、それぞれ博物館は様々な対応を迫られていました。その中で、例えば休館であるとか、あるいは人数制限とか、様々な苦勞をしながら活動してこられました。この全く新しい事態の中でいろいろと急な対応をしてこられたわけですが、その間、どのような対応を取ってこられて、その中で再開に向けてどのような工夫をしてこられたのか。まずは自己紹介を兼ねて、それぞれの先生方、各館での取り組みの様子などを簡単に御紹介いただけたらと思います。

島先生は、今は国立国際美術館の館長ですが、パンデミックが始まった時期は金沢 21 世紀美術館の館長をしておられました。このことも含めてお話をお聞きできたらと思います。

島 島です。ちょっとだけ自己紹介をさせていただきますと、私自身は早稲田大学の実は理工学部の出身でして、金属工学をやっていました。黄銅の鑄造実験をやっていたんですが、一方で油絵を描いてたりして、そのうち大学の美術史をやっている先輩から、島君、学芸員って楽な仕事だから、そっちへ行ったらいいんじゃないという、非常に安易な励ましをいただいたことがきっかけで、最初に富山の美術館に勤めました。ちょうどその頃に全国各地に美術館ができていた時代でして、1980 年前後です。美術館が各県に一つか二つか、どんどんできていた時代でした。兵庫県立近代美術館は 70 年代末でしたか？

服 部 いえ兵庫県立近代美術館は万博の年なので、70 年です。

島 もっと早いんですね。兵庫県美はもっと長い歴史がありますが、私が最初に所属した富山県の美術館は、81 年のオープンだったんです。ちょうどそのタイミングで、学芸員の資格さえあれば入れるような非常に緩い時代でして、とにかく潜りこんだのです。そういう意味ではこの甲南大学が最初文理学部から始まったということで、私の体の中には理と文が分離せずに、いまだに残っているということで、よろしくお願いいたします。

ちょうど今から 1 年半ほど前ですか。2020 年 2 月の中旬、まだクルーズ船での感染が話題になっていて、大変だとは思いますが、何となく他人事だという感じでいました。



その当時、金沢 21 世紀美術館にいましたが、いつも 2 月頃に定例会議というのがあります。なぜ会議をやるかという、5 月頃に金沢には一気に大変な人がやってくるんです。連休中に 1 日当たり 2 万人ぐらいの人が 21 世紀美術館に来館するんです。その 2 万人のうち、大体 6,000 人ぐらいがチケットを買ってくださって、展示会場に入るわけです。これはもう大変なこととして、お客さんも大変で、チケット買うのに 1 時間待ち。いらっしゃった方は御存じだと思いますけれども、21 世紀美術館にはチケット売場のすぐ近くにレアンドロ・エルリッヒさんというアルゼンチンのアーティストの…

服 部 スライド出しましょうか。

島 そうですね。

最初に、美術館の外観がもし出れば。その、レアンドロさんのプールの作品（図 1）というのがありまして、プールをパッと見ると、下に人がいるんです。いるように見えるという作品なんですけども、いずれにしてもその大人気のプールの作品を見るのにまた 1 時間待ちなので、トータルで大体 2 時間もかかります。

その当時は、まだ今のようなウェブチケットみたいなものは導入してなかったんです。ところが、2020 年 3 月に入りますと様相が一変しまして、4 月 7 日にはいきなり初めての緊急事態宣言が出ました。そのために私たち自身も金沢から東京への出張が禁止になり、東京から人をお呼びすることもまかりならぬということで、4 月下旬から始まる予定だった、内藤礼さんという方の個展の準備が全くできなくなりました。なおかつ、その作業をする人が東京から来るものですから、展示していたコレクションの片づけの作業もできなくなってしまいました。

ですから、2020 年の 5 月、金沢 21 世紀美術館開館以来初めて、5 月の連休に人がいないという驚くべき事態が生じました。

その後、5 月 25 日に宣言が解除されまして、展示作業と片づけなど、いろいろ始まりました。内藤礼さんの個展は 2 か月遅れの 6 月 27 日に開会しました。21 世紀美術館は、もともと一つの展示会の会期をとてとても長く取ってしまって、普通の美術館ですと大体 1 か月から 2 か月ぐらいが多いのですが、金沢の場合は 4 か月近く会期を取っていましたので、2 か月遅れでしたけれども残りの 2 か月、展示会をなんとか開催することができました。

それで、新型コロナウイルスに対応するために、2020 年の 3 月から 4 月にかけては、国のガイドラインですとか博物館からも色々な指針が出てましたので、そういったものを参考にしながら美術館内の課長ですとかリーダーとか、あとは監視員の方々と連携しながら、美術館での対応策の検討を重ねて実行に移していったわけです。

お手元にも資料があったと思いますが、図面（図 2）をご覧くださいと、この美術館はとにかく人がた

くさん来てもらえるように設計されている美術館でして、いらっしゃった方は兼六園から歩いてくるとそのまま美術館の敷地に入ってしまうんです。兼六園の出口から大体 2~3 分ですぐこの美術館の敷地に入りますので、中には美術館の中に入ってきてから、21 世紀美術館どこですかなんていう質問をされることも度々あります。この建物が平屋といいますが、1 階建てで展示室もライブラリーも、授乳室とか、そういったものも全部 1 階に設置されています。これが市役所の上から見た建物の写真（図 3）です。

丸いガラスの箱になっていまして、その中に展示室ですか、先ほど申し上げたような、いろんな施設が入っています。

無料ゾーンがたくさんありまして、その周りをぐるっと回ることができます。私もお昼を食べた後どうしても眠くなるものですから、ちょっと一周ぐるっと回って気分転換をして、また部屋に戻るようなことをよくやっていました。上から見ますと、全部で 4 か所出入り口があります。実はもう一つ地下にも出入り口がありますので、5 か所出入り口があるんです。5 か所からお客さんが出入りしますと、やはりちょっと対応し切れないということで、コロナ感染症に対応するために、出入り口を 3 か所に絞りました。そして、その 3 か所に検温装置、消毒用のアルコールを設置して、館内に 1,000 人以上の人が滞留した場合には、入館を一時ストップするということを、いろんな指針を参考にしたり、面積を計算したりして行いました。全ての出入り口で人をカウントできる機械が導入されていますので、人数が必ず把握できるようになってるんです。実際には 1,000 人近い滞留もあったんですが、入館自体はストップすることなく、何とかしのぐことができたということです。

一方、先ほどちょっと申し上げましたプールの作品ですが、まず図面をご覧ください。これですね。これがプールの下からの写真（図 4）です。入ったことがある方いらっしゃいますか。結構いらっしゃいますね。ありがとうございました。

中はそんな広いスペースじゃないんですね。ここはやはりお客さんが集中するものですから、緊急事態宣言が解除された後も、夏休みの前までは、つまり 6、7 月ぐらいまでは、ここは閉鎖しました。

ところが、やはり夏休みにはどうしても見たいという要望が多いだろうということで、その御要望にはお応えしようということになり、10 分間に 5 人の入場を認めることにして、整理券を配って再開しました。50 分で 25 名の方に見てもらい 10 分間は換気をするというかたちにしました。ここはかなり狭いスペースでして、空気を送り込むか、あるいは空気を外に出すような形で換気の時間を取りました。

ところが、10 分で 5 人でやっていると、ちょっと問題が出てきました。なぜかといいますと、カップルが多いんです。そうすると、2 人入って、2 人入って、次にいきますと 1 名だけでは入ってくれないんです。その次の方も 2 人で、私たちは一緒に入りたいということになります。事務方とも相談して 6 名にしましょうということになりまして、それで少し流れがよくなったというような、そういうことがありました。

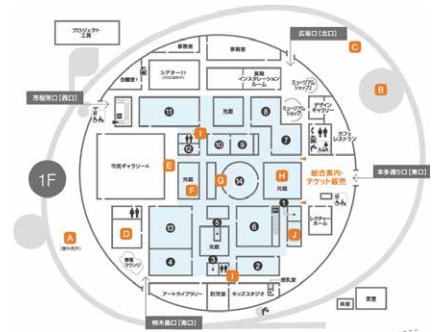


図 2 金沢21世紀美術館図面



図 3 金沢21世紀美術館外観、撮影：中道淳／ナカサアンドパートナーズ、写真提供：金沢21世紀美術館

それから、ちょっと上の画像を御覧ください。いらっしゃったことない方のために説明しますと、上から見ますと、まさに小さなプールが美術館の中に一つあるんです。上から見ると、下に人がまるで水の中にいるかのように見えるという作品です。下を見ますと、上と下とで見知らぬ同士もやり取りができますし、あるいはお友達同士、上と下とで写真を撮ったり、そういう楽しみ方ができます。平たい言い方をすると参加型の作品といえますか、お宝をありがたく鑑賞するというよりも、お客さん自体の主体的な動きによって作品を体験するという、こういう作品になっているわけです。



図4 レアンドロ・エルリッヒ《スイミング・プール》2004年、金沢21世紀美術館蔵、撮影：渡邊修、写真提供：金沢21世紀美術館

開館の16年、17年目に入っていますが、これがいまだに大人気で、多分今日あたりからとんでもないことになっていると思います。

とりあえず一旦これぐらいで、また順次お話をできればと思います。

服部 ありがとうございます。金沢は体験型の作品がとても多いところなので、それだけに単に鑑賞するのとは違う難しさがありますね。ありがとうございます。

では続きまして、だんだん文系から理系へという流れで、今度は小野田さんをお願いします。

小野田 よろしくお願ひします。神戸市立博物館に来られた方はおられますか。多分、神戸市民の方が多くと思いますが、いつもありがとうございます。

私からは、時系列にお話をしていきたいと思います。緊急事態宣言、全国的に解除していいのかどうか分かりませんが、ようやく9月30日に解除されました。

次のスライド（図5）で、令和2年度、もう遠い昔のようではありますが、当館では大きな展覧会をたくさん企画していた年でもありました。と申しますのは、この前に1年半休館いたしまして、博物館のリニューアルを行ってありましたので、こけら落としの意味も含めて大きな展覧会を開催して、博物館を訪ねてもらおうというのがその根底にあったのです。ところが、3月28日から開催する予定であった、「コートールド美術館展」は開催中止に至りました。

皆様方と接する一番の大きな機会というのは、多分展覧会で触れ合うということだと思うのですが、実際それができなかったという訳です。緊急事態宣言は4月7日に発出されたのですが、共催者等も周知の仲であったので、いろんな会話をしていく中で裏話も入ってきました。メディアは「外に出たら駄目だ」ということを言っているわけです。新聞社や放送局が、その一方で「博物館に来てくださいとはなかなか言えせんよね」という話が取り交わされた記憶があります。

緊急事態宣言の発出は4月7日からで、展覧会は3月28日からだったわけです。先ほど申し上げた事



情もありまして、「ちょっと様子見をしよう」ということになりました。本当に去年度の場合は、手探り状態で運営をしていかざるを得ないという状況でした。共催者にメディアが入っていますので、東京の情報とかも様々な点をとらまえながら進めていこうという形で一旦は落ち着いたんですが、第1回目の緊急事態宣言が4月7日に出されまして、当面5月6日まで休館という形になりました。



神戸市立博物館「展覧会の組み替え」図5

さらに時系列でいくと、5月4日の連休のさなかに31日まで緊急事態宣言は延長ということが決定されました。となってくると、展覧会の規模的には20万人以上の人に見てもらいましょうという想定をしていましたので、博物館を開ければ必然的に「密」になるであろうということが予測できます。6月に入った段階で残りの会期は21日間しかありませんし、その間、3日間は休館日なので、18日間で20万人が入る可能性があるとした場合、1日1万人ということは、密が密を生むというような状況が想定されたので、中止をせざるを得ないという判断に至ります。

その判断が正しかったかどうかというのは分からないのですが、中止のやむなきに至りました。

これへの対応としては、皆さん方の中にも実際に御覧いただいた方はあろうかと思いますが、ウェブでコートールド美術館展の神戸会場と東京会場の展示風景を流させていただきました。御覧いただいた方おられますか。今でもYouTubeでは見られるようですので、一度会場の雰囲気というのを御覧いただけたらと思います。

なぜこんな話を申し上げるのかといいますと、コロナで大騒ぎし始める段階で、博物館では完全に展示準備は終わっていたわけなんです。全部展示を終えて、明日からお客さんが来ても大丈夫ですよという状況であったにも関わらず、開けることができなかった。ですので、博物館にはコートールド美術館の作品が有名どころのものを含めて、ずっと並んでいました。これがウェブで公開されたわけです。

展示に来ていたクーリエ（美術品随行員）は展示まではしてくれ、その後帰国しました。その当時、御存じのように海外への渡航は禁止されていました。今でもそうですが、渡航すると14日間の待機をさせられるということから、撤去には来てくれませんでした。

作品が全て英国に無事戻りましたので、申し上げてもいいかと思うんですが、基本的に、借用先の美術館の学芸員を含めたクーリエが会場にやってきて展示・撤収をするのが普通で、それが彼らに課された使命なのですが、撤収時には誰も来てくれなかったのです。どうしたのかというと、Zoomなどのオンラインツールを使って撤収を行いました。時差はロンドンですので9時間あるわけです。その9時間の時差をぬって、昼間、例えば午後3時ぐらいからがメインの作業時間になるのです。映し出された映像に対して向こうから指示を受けるといった撤収作業が繰り返されました。

ですから、コミュニケーションツールはオンラインでの会話でした。本来なら対面で行うのが、コミュニケーションがよく取れてはかどるんですけど、それができなかったということです。

もう一つ裏話を言うと、作品の返却には、作品と同じ飛行機にクーリエが必ず乗って帰る、というのが原則なのですが、実はそれもできませんでした。輸送業務を受け持つ某社の社員が、ヒースロー空港でとんぼ返りをしています。つまり、空港でチェックアウトすると入国してしまうので、チェックアウトをせずにずっと空港内に留まって、帰りの飛行機に乗って帰ってくるというような方法をとったようです。これは裏話ですので、忘れていただいても結構です。

その後では、企画していた「ボストン美術館展」が、最初の東京から開催ができなくなりました。神戸での会期は10月24日からを予定していました。最初に東京都美術館で立ち上げをして、うちにも巡回してくるという展覧会です。

なぜできなかったかという、アメリカ国内はパンデミックが早く起こっていたためです。ボストン美術館はマサチューセッツ州にあるんですが、完全にロックダウンしてしまった。多分、皆さん方も去年はよく経験されたと思うんですが、在宅で仕事をしなさいということで、ほとんど全員が美術館に出てきては駄目ですというような通知があり、さらには完全にロックダウンというところまでいきつきました。そのため、輸送用の箱（クレート）は作っていたけれども、空港までいく術がないということで、中止になった次第です。

展覧会が二つ開催中止となった訳で、「代わりの展覧会を何かしなければいかんのでは」、という状況に陥ったわけです。

博物館、美術館はもちろんそうですけど、何かあっても開けておく必要がある。多分、これは後々の話題ですね。博物館の「不要不急の話」になろうかと思うのですが、別の展覧会を代替展とすることを企画しようということになりました。実は、開催中止が決まってからも、ずっと博物館にコートールド美術館の絵画作品などはありまして、秋以降に収まってからそれを実行しようということになりました。

しかし、昨日言って明日すぐ展示ができるわけではなく、少なくとも、自館のコレクションだけでも最低3か月間ぐらいは余裕を持って展覧会を組み上げよう、それならもう秋から仕切り直しにしましょうということにしました。「ボストン美術館展」の中止となった期間に、一つは夏に予定していた「^{なごみ}和のガラス」という展覧会をスライド開催しました。そしてこの御時世なので、社会につながりが欠けてるからこそ、博物館資料を基にしてつながりに照準を当てることで、皆様方の興味関心を引く作品をもとに、「つながりを考えてくださいね」というメッセージを込めた展覧会「つなぐ」を企画しました。そのようにして、予定の組み換えをして展覧会を実施したのが令和2年度でした。

先ほど、島館長からもお話がありましたけども、やはり「コロナ対策をどうしたらいいのかが分からない」というのが、実際のところでした（図6）。ICOM（国際博物館会議）から来館準備という項目が出されており、3平米に1人の基準を超えた場合は入館制限を行うという基準に拠らざるを得なかったのです。ただ、御承知のとおり、博物館の作品は均等に展示されているわけではなく、教育的配慮の下に並べられているわけです。音声ガイドもあったりすると、どうしてもそこに人が集まります。ですので、「それはちょっとどうなのかな？」と思いながら、それでも指針に代わるものはなかったのが、当館でいうと大体、特別展示室が1,500平米ぐらいなので、滞留者としては500人を基準と考えましょうというスタンスで入館制限を行っていました。

ただ、幸いなことなのか、幸いじゃないのか、現段階、この夏まで開催してる展覧会では、この滞留者

500人を超えることはありませんでした。多分、行動制限の中で皆さんが自粛されていたのだと思います。

さらには、ここにお願い事が書かれているんですが、来館者には手指の消毒をお願いしました。一時入手が困難になった時期もありました。それでも何とか無理をしながら消毒液を入手していたのです。あと、検温の機械ですが、今はどこの百貨店に行っても当たり前のよう入口に置いています、当時はそんな検温の機械を手に入れるということは、ままならなかったというような状況でありました。

あと、神戸市立の博物館ですが、兵庫県内の施設なので兵庫県の指針に従うわけで、兵庫県の追跡システムを導入しました。これは希望者のみでしたが……。また観覧時には会話をお控えいただくということと、やはり密の回避を徹底しました。

さらに、来館者だけではなく我々も管理を徹底するということで、事務室用にアルコールの消毒を置き、みな検温してから来るというような体制をとりました。さらには、運営スタッフに関しても接客という点では、今では飲食店などどこでも置いていますけれども、アクリル板、実はアクリル板も入手することがほとんど困難で、あちこちの業者をお願いして、アクリル板を設置しました。今はマスクだけになりましたが、そのときはフェイスシールドも着用をお願いしていたように記憶しています。

これも後ほどの話題に関わってきますが、神戸市立博物館が多分遅れてるのだと思いますが、予約システムを導入しました。キャッシュレス化についても、今なら当たり前の話だと思うんですが、導入しようということになりました。予約システムについては、また後ほどお話をしたいと思います。

講演会の開催にも工夫が必要でした。今日の会場も区角割りをして、市松模様に席が設けられています。当館の講堂は定員168人ですが、40人定員で各種の講座を行っています。ですから、レクチャーとかにお越しになった方の印象としては、「すかすか」であったと思われます。

今年の夏もそうだったんですが、参加者多数の場合は抽せんになります。そうすると外れた方からの苦情が出ます。何で当たらないんですかと。この前も職員が対応していましたが、何回講座に申し込んでも当たらない、「何でやねん」という苦情の電話があったり、そういったことも一つの苦労だったかと思います。

服部 せっかく準備をしても、展示が完成した展覧会がそのまま誰にも見られず終わってしまうことが本当に心が痛いというか、関わった方々の御苦勞を思うと本当に辛いですね。それは日本全国で、世界中で、そういうことがたくさん起こってたということですね。

お待たせしました。亀田さん、お願いします。

亀田 滋賀県立琵琶湖博物館からまいりました、亀田です。

「人数制限の対応など」参考資料④神戸市立博物館
ICOM(International Council of Museums;アイコム、国際博物館会議)の「来館準備」に即して、入場制限のガイドライン「3㎡に1人の基準を超えた場合は、入館制限を行う」ことにしたほか、来館者への依頼事項
(ア)来館時は、マスク着用のうえ、検温と手指の消毒の依頼を徹底
兵庫県の追跡システムの登録依頼を行っている(希望者のみ)。
(イ)観覧時には、会話の自棄と、密の回避(間隔(2m程度)の確保)を依頼
さらには、職員等の安全確保として
(ア)事務室等にアルコール消毒液を設置し、適宜手指の消毒を徹底
(イ)インフォメーションのスタッフには
接客用のアクリル板を設置
混雑時等間隔を保てない場合は、マスクに加えフェイスシールドも併用
さらに、感染症対策という点で、「つなぐ」展からは
予約システムとキャッシュレスの導入
講演会やイベントなど「密」にならないように人数制限。
当館の講堂の定員は168人 ⇒ 講演会などは40人

神戸市立博物館「人数制限の対応など」 図6



図7 滋賀県立琵琶湖博物館 外観。
写真提供：琵琶湖博物館

琵琶湖博物館も、スライドを使って紹介させていただこうと思います。来ていただいた方もあるかと思いますが、最初に紹介しますと、当館は名前のとおり琵琶湖のほとりにある博物館で、湖と人間をテーマとしています。スライド（図7）の右手の端のほうに見えるのが琵琶湖ですけれども、まさにその真横に立っている博物館です。

今回自然系博物館ということでお呼びいただいておりますが、実際には総合博物館でして、いろいろな分野を扱っています。琵琶湖の生い立ちと生き物の移り変わり、人と琵琶湖の歴史、そして自然と暮らしのつながりなども展示している博物館です。

いろいろな博物館で、子どもも楽しめる展示スペースがあるところも多いと思いますが、当博物館にも、大人も子どもと一緒に楽しめるような展示室があります。また、資料や標本を手にとって、観察したり調べたりできるような展示スペースもあります。ちょっとほかと違ったところとしては、生きた淡水生物を展示した、いわゆる水族館のような水族展示があるというのが一つ特徴になっています。

スライド（図8）の一番下に赤字で書いてありますが、新型コロナウイルスの感染拡大が起こったのは、段階的に6年かけて常設展示のリニューアルを行ってきた最終段階の時期でした。ちょうど今年、最初に開館してから25周年になるのですが、20周年の頃から少しずつ常設展のリニューアルを進めていまして、本当は2020年の7月に、常設展示が全てオープンしましたということでグランドオープンとし、皆さんにたくさん来ていただこうと思っていました。しかしコロナの影響で、先ほどもあったように、展示業者さんが大阪から県外に仕事に来られない、また、皆さん在宅勤務になったこともあって展示物の製作が間に合わないという状況になりました。当館も休館ということにもなりましたし、結果的にリニューアルオープンが遅れ、10月に何とかグランドオープンを迎えられたという状況でした。

昨年度常設展示をグランドオープンしたところで当館の活動も一区切りとなることから、今年度からは新たに次の目標に向けてスタートするべく、新しい中長期基本計画の策定を進めていました。リニューアル後は、その目標を見据えながら同時にコロナの対策もしながらという、当館の節目でいろいろなコロナの影響を受けつつ、右往左往しながら取り組んできています。

その対応の経緯は大体こういったところです。2020年の1月、2月の頃は、自分たちのところに影響が及ぶということはまだそれほど意識しておらず、どうなるんだろうと思いつながらの様子見でした。それが2月の終わりに、あちこちで博物館が休館となり、当館も2月28日から全館臨時休館ということになりました。それから6月1日までの約3か月間、休館になったのが最初です。

休館中には、職員も一定割合が在宅勤務というのもあったのですが、再開に向けてどう準備しようかということと、



様々な委託職員がおりますので、休業にするのか、あるいは業務を継続するのかという判断を迫られるということもありました。

もう一つは、最初の頃は学校の休校が多かったので、子どもさんに向けて自宅で博物館を利用してもらうための工夫にも取り組み始めていました。

再開後は、ほかのところもそうだと思いますが、まずは展示室が密にならないための取り組みを始めました。入場制限を設け、人数の多いときには整理券を配ったりしていましたが、その後少ししてから予約システムを導入しました。あとは消毒や清掃の徹底をどうしたらいいのかということと、職員自体の感染予防です。そういったことは全くの手探り状態で、ほかの館でやっていることを聞きながら進めていったところがあります。

先ほども少し見ていただきましたけれども、特にリニューアル後の展示では、五感で感じる展示を目指しており、触ったり、匂ってみたり、感じたり、手に取って試してみるなど、そういった展示をなるべく取り入れようという方向でつくってきました。そういった展示が、一時期一切できなくなりました。これらの展示について、どこまでどのように利用可能とするのかということ、全部一つ一つ検討していくということを行いました。



あとは、他の方もおっしゃられていたことでは、様々なスケジュール、あるいは内容の変更がありました。リニューアルのことは先ほど言いましたけれども、当館ですと、通常企画展示を夏休みから10月ぐらいまで開催しているんですけども、こちら、資料の輸送ができず、オープンが延期となりました。実はこのとき、希少生物をテーマとした展示を予定してまして、上野動物園の初代のパンダ、ランラン、カンカンの剥製を借りてきて、文字どおり「客寄せパンダ」として展示しようという計画を立てていました。その他にも、大阪の天王寺動物園などほかの動物園の剥製もお借りして展示することを考えていたのですが、そうした資料の運搬について先が読めない状態になったため、企画展示もオープンと期間を延期し、10月17日から3月まで開催するということになりました。

他にもいろいろな形で影響があります。県ではいろいろな感染症対策に取り組んでいることから、県職員に対して感染症対策部署への動員があります。私たち学芸員は滋賀県職員なので、動員は学芸員も例外ではなく、すぐに起こったことではなかったのですが、今年の冬ぐらい、2020年の後半になってから、宿泊療養施設や保健所への応援依頼が来るようになりました。誰か1人来てくれないかという話があり、2週間程度、交代でぼつぼつと応援に行くということを、今でも行っています。

そういった形で、その時々県の感染状況と警戒ステージを見ながら、またほかの館での取り組みや、ICOM（国際博物館会議）や文化庁などいろいろなところから出される対策基準を参考にしながら、当館としてはどういうやり方が適してるのかを毎週会議で検討し、その都度方向性を決めて実施し、不具合があればまた改善してというのをずっと継続して今もやっている状況です。

ここまで言ってきたことを具体的に説明していきます。臨時休館は当館では3回行われていまして、直近ではこの9月30日まで休館していて、ようやく昨日からオープンしたところです。

私たちの博物館は、京都、大阪からの来館者が非常に多く、大体6割ぐらいを占めていますので、開館しているとどうしても県境をまたいでの移動を誘発してしまいます。あとは先ほどご説明したように、触れる展示が多いこと、また展示室によっては狭い空間もあるので、やはり閉めておいたほうがいいだろうということ、臨時休館を行っています。

それから、当館は琵琶湖岸に位置しており、湖岸緑地の駐車場が博物館の駐車場でもあるのですが、湖岸緑地では皆さんテントを張ってキャンプをしたり、バーベキューをしたりと、県外からたくさんの方が来られるので、緊急事態宣言の期間中は湖岸緑地の駐車場が全面閉鎖になりました。

そうすると、博物館の駐車場も閉めることになります。理屈の上では博物館の利用者だけ駐車場を使っているですよということもできますが、実際にはそういうわけにはいかず、ほかの駐車スペースが閉まっているとみんなその駐車場に殺到してしまうということになります。そこで渋滞が起きたり、トラブルが起きたらまずいということもあって、湖岸駐車場を閉鎖している期間は、当館の駐車場も、ひいては博物館も閉めるということになりました。

先ほど言いました、密にならないための入場制限ということでは、当館も独自で計算をして上限を決めています。1人当たり1メートルの距離を置くとして、展示室や利用空間の面積から割り出すと、大体このぐらいの人数が一度に滞在できるだろうということが割り出せます。瞬間的な上限を一旦200人とし、1人の滞在時間が2時間程度として計算をして、1時間ごとの入場者数を計算して制限をするということを行いました。

土日になると結構たくさんの方が来られて、時間ごとの人数がいっぱいになる。行列ができたので整理券を発行したのですが、整理券の数も限られ、夕方ぐらいになると、もう今日は入れませんということになります。そのため、結構トラブルが続出していました。

ようやく10月になって、予約システムを導入しました。それが右側の画面（図9）です。ウェブ上でも事前に予約できますし、来てからでも、その場で自分のスマホで予約もできるようにはなっていますが、やはり知らなかったという方も多く、年配の方ではそんなものは持っていない、使えないという方もあったりで、トラブルはどうしても残ることがありました。

また、予約システムには対応できない方に、その場で手取り足取り教えて予約を取っていただいたり、あるいは予約のチェックにも人手が必要になって、当初は手間暇が減るだろうと思っていたのですが、結構人手と手間暇がかかるものになっているのが実際のところ、

展示自体は、先ほども言ったように触ったり匂ったりするような展示は、今は使えまじんとお断りを貼って

「密」にならないための入場制限と
利用者の利便性に応える予約制導入

- 館内の適性入場者数(独自計算)
一人当たり1-2mの距離をおく
→展示室等利用面積で人数計算
→一時的な滞在者上限を400人とし、
滞在時間を推定して1日の来館者数
を1,200人までとして試行
※その後、感染状況や展示室面積の
増減により随時調整
- 予約制導入前:週末・祝日は整理券対応
来館者のトラブルや不満続出
職員の当番対応が必要
- Web予約システム導入(2020年10月10日~)
予約の確認、予約を知らない・できない
方の対応に人手が必要

滋賀県立琵琶湖博物館 入場制限と予約制導入 図9

いったりとか、狭い部屋、人が密になりそうな部屋については人数制限をして、時間を区切って定期的に消毒を徹底するということをやっていました。

長くなったのでこのぐらいにして、残りは後の議論の中でご説明しようかなと思います。

服部 同じ滋賀県の施設でも県立美術館は普通に開いていたと思うんですけど、それはやはり館の特性というのがあり、それで館の独自判断でつい最近まで閉じておられたということですか。

亀田 そうですね。県立でも、例えば安土城考古博物館とか、そういったところはほとんどずっとオープンしていました。当館の場合は、入館人数も多いですし、実際に来られている方を見ると県外から来られている方がすごく多かったのも、やはりそれはちょっとまずいんじゃないかということで、館独自で判断して県にも話をし、了解をもらって休館していました。

服部 同じ博物館でも、動植物、生き物を扱うとか、お客さんの層も違うでしょうし、いろいろ他にはない問題があったということですね。

ありがとうございます。ここからは、いろいろ会話をしながら進めていきたいと思います。もちろんパンデミックの中でいろんな活動が制約されたわけですが、一般に展覧会という活動は外からもすごく分かりやすく、博物館も大変なんだろうというのは、ある程度見えてくるんですけど、博物館の活動はそれ以外にも研究であったりとか、いろいろ先々の展覧会の準備とか、あるいは収蔵、収集であったりとか、いろんなことがあると思いますが、そんな中で今回のコロナで一番しんどかったというか、一番、これを再開するのは難しいとか、これに対処するのは難しいとか、一番ネックになったこと、しんどかったことはどんなことでしょうか。

島 今ちょうど感染者数が減ってきたので、今後のスケジュールも立てられなくもない状況になりつつはあるんですけど、それでもひょっとしたら11月ぐらいからまた増えてきて、年末年始にかけて第6波が来るんじゃないかと思いますが、今後の展覧会とか、様々な行事の予定を極めて立てにくくなりました。

例えば、どこの美術館でも、海外から持ってくる作品だったりとかもあって、それができないと展覧会が成立しないわけですから、やはり予定がまず立てにくくなったところが非常に大きいです。

人もやはり呼ぶことができないということもありますので、なかなか難しい局面を迎えているなと思います。

ですから、現状ではこれまで培ってきた人脈だったり、あるいは信頼関係の蓄積というものを、いわば食いつぶしているような感じというのはあります。電話一本で、この人が言ってくるんだったら貸そうとかか、あるいはオンラインでも何とかやり取りしようかということは可能になるんですけど、これもあと何年持つかというような気はします。

先ほど小野田さんのお話にもありましたけれども、いわゆるクーリエという、作品に付随してやってくる海外の職員の方をお呼びすることができない。展示作業なんかも、アーティストの場合でもそうですけども、オンラインでやり取りすることになる。先ほどもお話にもありましたが、国によって朝早めにオンラインで

一緒に会場を見せ合って確認してもらうとか、あるいは夕方から夜遅くにかけて作業を確認していただくという
ようなことがあります。

服部 いろいろな国から借りていると、こちらは先方の時差に合わせて一日中仕事をしなければなりませんね。

島 展示作業も通常の日数よりも、2～3日延ばしたことはありました。

大阪の国立国際美術館でも、ついこの前までやってたミケル・バルセロというスペインの美術家の個
展を、やはりオンラインで展示作業を行いました。

これはちょっと変な言い方ですが、アーティストとかクーリエ、その作品に付随する職員の方の交通費は
節約できるんです。人によってはビジネスクラスじゃないと嫌だとかもありますから、往復最低でも数十万、
宿泊が長ければ100万円近く、1人当たり費用がかかってしまうわけですね。それを新聞社が負担する場
合もあれば、美術館主体でやれば美術館がその数百万のクーリエ代、作家招聘費、あとは食事代も全部
含めて負担する場合もあるわけです。トータルすると1,000万、2,000万という規模でお金がかかるんです。

節約できたんで、じゃあ今後はこれでいいじゃないかというような話もなくはないんですけども、やはり
それは既に先方との面識があったり、事前にアーティストが美術館に訪れてその場を確認している、あるい
は職員同士の信頼関係が既にあるという場合に限られますので、このオンライン形式によって、確かに部分
的には節約になりましたけれども、やはりいつかは立ちいかなくなってくる。実際にはやはり、展示室の照
明だったり、あるいは会場全体の雰囲気といいますか、そういったものはやはり現場で立ち会ってみないと
分からないことがあります。

作品によっては照度を非常に絞らないといけない場合もあるので、そういうことはやはり現場に来てい
ただく、あるいは我々が作品を貸し出す場合でも同じような条件がありますので、そういった意味ではなか
なか困難な状況がまだしばらく続くのかなという気はします。

服部 ありがとうございます。金沢21世紀美術館にしても、それから国立国際美術館も、海外の作家さん、
現在活躍中の作家さんたちとのやり取りが多いので、そういうのはやはりその場に来ていただいて、学芸
員と丁々発止でやり取りをしながら、それが展示内容に関わってくる場面もありますね。それが予定調和
的になってしまうというか、あらかじめ決められた以上のことにはなかなかかなりにくいということですね。

小野田 美術館については、先ほど島館長からお話があったので、その辺のところは省きますが、多分国外作品
を用いた展覧会は、皆さん方も楽しみにしていて、特に国立国際美術館などには足を運ぶということになっ
てるかと思うんです。展覧会を企画し、実施までには3～5年かかりますが、今ちょうどその準備がびたっ
と止まっています。企画について、いくつかお話はお聞きするのですが、実現にむけて、先方との交渉も、
それも本来は先方に行って話をするのが実際のところなんです、それができない。Zoomでもできるとい
えばできるんでしょうが、やはり人の顔を見て話すということは大事だと思います。このままコロナが収
束しなかったら、多分3～5年の間は大きな海外展は、あり得ないだろうなということは感じております。

これはまさに日本の博物館、美術館の弱みがここに露呈してきていることだと思います。これは別に国外
だけに限ったことではなしに、国内でもそうなんです。

実はこの夏、当館でいろいろな展覧会をさせていただいた中で、私も一担当として関わったのですが、
あちこちの所蔵者、所蔵館から、緊急事態宣言のところから県境をまたいで来ないで（この逆もあるの
ですが）、と言われまして、資料調査ができなくなったこともあります。そうなってくると、展覧会の構成を組
み替えなければならなくなるという状況になります。私自身は、毎日他府県またぎをしていて、大阪から
神戸の勤務先に行ってるんですが……。我々は、個人の所蔵者の方とか骨董屋さんからお借りすることも
多いのですが、個人さんとか骨董屋さんには年配の方が多いので、やはり「来ないでね」と言われるこ
ともあったりしたようです。対面せずに、「そこに置いとくからどうぞ」ということもありました。これも今
だから言える裏話ですが、某所では部屋において失礼した事例もあります。我々は通常は、作品の検品と
いう作業をして、作品の状態を双方で確認をするんですが、そのまま「手渡しで結構です」、「うちで検品
してからまた連絡を差し上げます」ということです。お互いに立ち会ってその場で確認するのではなく、箱
の状態でそのまま渡して終えるという方式です。特に、都心部と感染者の少ない地方はコロナに対して非
常に敏感でした。当館でも未だにお借りした作品を返せないのがありまして、宣言解除後の10月中旬に
お返しに行くことになっています。

活動を制限されると、資料調査ももちろんそうなんですが、研究に対する制限もなされました。緊急事
態宣言が発出されると、どうしても、「来ないでね」ということもありました。このほか、ニュースで賑わ
しましたので御存じの方も多いかと思いますが、北九州のゼンリンミュージアムで伊能忠敬の地図が発見
されたということが6月ぐらいの報道にありました。「3枚揃った小図が出てきた」という内容なんです
が、ちょうど伊能図を研究対象とした平井科研のメンバーで調査に行こうという話をしていたのですが、そ
れも残念ながら延期になりました。11月にまた再開するようではありますが、一寸どうなるか。そういえば、
当館で夏に伊能展をしていた時、予定していた館内での勉強会も、流会となっています。

服部 ありがとうございます。先々の展覧会もそうですし、調査研究も含めて、とにかく人の移動に関わるものが
とても難しくなって、人と人との共同作業が難しくなっているということですね。ありがとうございます。

亀田 ウィズコロナの課題といいますと、移動制限というのも非常に大きいのですが、一番最初に響いたのは
資材不足です。それこそ、アルコールがない。1人がアルコールを1回に大体どのぐらい使用して、1日で
何人来るとどのぐらいの量がなくなるのかを計算すると、今資材を調達しているスピードがこのぐらいなの
で、1週間でなくなるよねということになったりとか、実は資材不足が心配で、もう少し休館を延ばしましょ
うかという話になったことも、最初の休館のときはありました。そのぐらい、最初は本当に資材が不足し
ていました。

その後それは大分落ち着いてきて、マスクにしろアルコールや消毒にしろ検温にしろ、大分慣れてきて、
その不安はなくなったんですけども、やはりコロナの影響を受けた現場では、人手の不足というのが
すぐあります。消毒や清掃作業をするのにももちろん人手や労力が要りますし、入り口での消毒や検温にも
人手が要ります。自動の消毒器も置いてはあるんですけども、人数が少なければそれで大丈夫ですが、や
はり最初のうちは、ほとんど人がついて1人1人しゅっしゅっと手に消毒したり、そういうこともしていました。

また、先ほどの予約システムにしても、バーコードかQRコードでもあって、びっと機械で感知して予約オー
ケーみたいなシステムまでいけていれば、本当に自動でできるのですが、そこまでするにはお金がかか
ります。システムもそうですし、バーコードなり何なり、読み込む機材もいるということになると、そこま
では予算が確保できませんでした。そのため、予約を受け付ましたというメールの画面をいちいち人の目で

見て入っていただくということをやっていました。今は緊急雇用の予算で展示の現場にいるスタッフを増員しているの、回るようになったんですが、一時期は学芸員や事務職員が、特に休日、土日に当番で入り口に立って、チェックをするというのをずっとやっていました。そのため、次の週末は誰が当番でと休む暇もなく、ほかの作業をしながらそういった対応もするのは、結構しんどいところがありました。

あと、来館者が来ないとなると、いろいろな意味で収入減の影響が出てくると思います。実際に休館せざるを得なくなってしまう施設というのも出てきています。うちは滋賀県立の施設なのですぐにはあまり影響はないのですが、やはり長期的に見ると、人が来ないイコール収入減ですから、それなら予算を減らすみたいな話も出てこないとも限りません。そのあたりはちょっと切実な問題にはなります。もちろんそれでさらに利用者も減っていくということになります。利用者が減ると、スタッフも減らすようにと言われて、減らさざるを得ないということも出てきたりします。いろんな形で博物館に関わっておられる方がいますので、やはり博物館の活動自体が縮小していくと、そういった博物館に関わる人たち、人材も、特にそれで生活している方々は、生活のためにそこから離れざるを得ないということになっていきます。

時間があればあとでもう少し紹介したいと思いますが、当館には、展示交流員という、展示室で来館者との交流を担うスタッフがいます。長年勤めて、展示室での交流のスキルや技術を蓄積した、本当にベテランの交流員さんたちもいます。今は何とか業務を継続しているんですけども、もしどうしても休業せざるを得ないということになってくると、生活がかかっているのではかの仕事に移らないといけない。そうすると、せっかくいろいろなスキルや知識を持っているスタッフの方が離れていってしまうので、博物館としてはすごく大きな損失になってきます。

です、そこを何とか支えていくために、館として頑張るところもありますが、もう少し大きな仕組みの設備が、もっといろいろあったらいいのかなと思います。

あと、さっきも言いましたが、美術館などでは、美術品をしっかりと鑑賞するという形で直接触れるということはないと思うのですが、自然系の博物館の展示では、実際触ってみたりとか、顔を近づけて匂いをかいでみたりとか、いろいろな展示物に触れる機会が多く、特にそういった展示手法が当館では多く用いられています。展示として非常に効果があるということで、どんどん取り入れていっている博物館も多いと思うのですが、今回はそういったものが一切使えなくなりました。こういうコロナの状況の中で、今までの展示方法とは異なる、これからの展示、それをどう進めていくのかは、みんながすごく迷っていて、今いろいろなところで方向性を考えているところです。

あとはやはり、コミュニケーションが取りにくいというのは、先ほどもおっしゃっていたとおりです。スタッフや博物館の利用者の方と、いつでも顔を合わせることができずに触れ合うことで、いろいろな形でのコミュニケーションがあったのですが、なかなかじかに話をする機会が取りづらいため、どうしても距離が出てしまうというのは実感しています。今後どうしていったらいいのかなと考えています。

服 部 3 人の方々の話から、様々な問題があるということが分かったんですが、コロナ禍の中では、これはコロナだからというように、コロナが新しい取り組みの理由付けになっている場合もあると思いました。

一方で、先ほど小野田さんが日本の博物館の弱みとおっしゃっておられたように、日本の博物館運営とか、博物館行政の問題点が今回のことで浮かび上がってきたという部分もあるんじゃないのかなと思います。

これまで普通だと思っていたことに疑問を抱いたり、コロナで初めて意識された問題点みたいなこともあるというような気がします。そのあたり何か感じておられることはありますか。

小野田 うちが一番その弱みを握っているんだと思うのですが……。最初にもお話を申し上げましたが、展覧会の準備はできたけれど公開できないとなると、皆様方は、どれぐらいの額を考えられますか。海外から作品を持ってくる大がかりな展覧会となると、神戸市立博物館でも、最低でもうん億円以上かかっており、中止となると全て水の泡ということになってきます。途中で中止になるのであれば、痛手は少ないのですが、「コートールド美術館展」のように準備までして開館できないとなると、何億円というお金が一瞬のうちに消えてしまう。

当館では細々と我々の研究成果を発表する展覧会を開催しながら、皆さん方が多く訪れて収益があげられる展覧会を併用することで収支バランスをとる、という運営形態を震災以降繰り返してきていますので、収益が上げられなくなると、財政当局も見過ごしてはくれなくなるでしょう。査定が厳しくなってくる。ましてや人数が入らなくなると、この展覧会に本当に人は入りますかというようなことを言われ出しますよね。予算計上は、入館者予想に合わせてするのですが、入館者が減ると、「博物館の予算はどうなんですか」と、皮肉っぽく言われるというところがあります。

服 部 ありがとうございます。その辺の事情は、国立国際美術館もそうですよね。先鋭的な展覧会と同時に、海外の名品を紹介する大きな展覧会もしておられますけれども、そのあたり、島さんはいかがですか。

島 そうですね。市立の博物館とはやり方が違うかもしれませんが、やはり特に新聞社とかテレビ局が大規模な展覧会の企画をしています。メディアの文化事業部の力というのは、普通の美術館ではできないネットワークをお持ちだったりするので、そういったものによって、例えば直近でいうと国立国際美術館で開催したロンドンのナショナルギャラリー展は、上野にあります国立西洋美術館と一緒に開催した展覧会ですけれども、最終的には入場者を制限しながら展覧会としては開催できましたけれども、小野田さんがおっしゃったように、完全に中止になった展覧会も幾つもありますし、それは本当に億単位で損失が出ています。国立美術館の場合はどちらかというと新聞社、あるいはテレビ局の負担になりますので、国立美術館自体には大きな影響はないだろうと思われがちですが、入場料収入を当てにした上での独立行政法人、国立美術館全体の運営の収入になっていますので、それが一挙になくなってしまったということです。今、日本に国立の美術館が全部で 6 つあり、国立新美術館という特に大きいのが、東京六本木にあります。ここは取りわけ、新聞社、テレビと共催でやる大展覧会が多いんです。ですから、あそこは国立国際美術館の多分 10 倍以上の収益減だと思うんです。

こちらは大阪にあって、東京は大阪以上に大変だったんだよということではなくて、実は独立行政法人国立美術館というのは全体で一つなんです。ですから、六本木がこけると、独法全体がこけてしまうという状況があります。

服 部 国立美術館全体の収入のかなりの部分が国立新美術館の大展覧会にかかっているということですね。

島 そうなんです。そうすると、やはり文化庁あるいはその上の文部科学省からも、もっと工夫していろいろ収益を上げる方法を考えなさいという、そういった指導がどうしても来ますので、なかなか難しい状況ではないかと思います。

しょうというようなことも、当時よく聞かれました。

島 たしかに鑑賞環境は良くなりました。

服 部 人の肩越しに、背伸びしながら見るような、絵の前で立ち止まらずすぐ動き出さないといけない、そんなこれまでの展覧会のあり方をもう一度考え直さなければいけないような気分にもなりました。

島 あと、日時指定によって、その時間帯に行けば、多少の行列はあってもその時間に必ず入れるという条件が整ったので、そういう点では鑑賞環境は格段に改善されたと思います。特に金沢については、とにかく混雑していましたので。日時指定チケットを導入したことによって本当にすいすいとお客さんが流れていたのは、非常に印象的でした。

服 部 このようなことと経済的なことをどう両立させるかというのは、とても難しいことですね。自然系の博物館はまた別の問題というか、課題とかはありましたか。

亀 田 自然史系でも、収入など経済的なことももちろんあります。収入で言うと、当館はリニューアルもあって、地元の企業の方から寄附を募る活動をずっとしていました。結構頑張って寄附していただいていたのですが、コロナで企業も厳しくなっている中で、企業回りをして寄附をくださいとかサポートしてくださいというのは憚られ、そういう営業活動をずっとストップした状態になっています。それでも、水槽サポーターという制度など、今まで継続して支援してくださっているところでは、引き続きサポートを続けていただいているところもあるのですが、新たにどんどん開拓していくといったことは、しづらくなっているというのはあります。

それから、展示室の中が少し落ち着いたというのは自然史系博物館でもあります。入場制限を始めてすぐの時期に展示室を回っていて思ったのは、今まではあまり見ていただけていなかった展示物、ずっと素通りされてしまっていたような展示を、熱心に見ていただいている方があったり、丁寧に見ていただいた痕跡があったりということで、じっくり見ていただける環境が逆にできたのかなという部分が確かにあります。

あとは、自然史系ですと、野外で観察会とか、体験教室とか、そういった行事を通常は頻繁に実施しています。ある程度感染が落ち着いていれば、屋外であれば注意しながら観察会をやっていきましようということはできるんですが、本当に制限されてくると、そういった行事も全部中止になっていました。自然史系、あるいは地域博物館だと、本物の野外の生き物や自然、あるいは地元の人たちの暮らしなど、現場で触れ合ってほしいというのはあるんですけども、それが非常にしづらくなりました。地元でいろいろ協力をしてくださった方ともやり取りがしづらかったりとか、一緒にやってきた団体さんやボランティアの方々とか、そういった現場とのコミュニケーションや、途中経過を見ていただくということなどが、すごくしづらくなっているのを、何とかしたいというのはあります。

服 部 やはり人とのつながりの中での研究活動なり普及活動といったところの問題ですね。

ちょっと話題を変えて、せっかく大学で話をしているので、ちょっと教育との関連の話をできればと思うのですが、美術館、博物館、どちらでも今はそうなんでしょうけど、小学生の団体を受け入れたりとか、子どもたちがたくさん来館することを通じて未来を育むというか、そういう活動にいずれのところが大いに力を入

ですから、新聞社、テレビ局も今後はそういう展覧会はできるのだろうかという、今その瀬戸際だと思います。実際に計画しづらくなってきていて、収益的にもう、収入がないものですから、今後何が起きてくるかといいますと、入場料金の値上げです。つまり、これまで30万人の人が来てくださる展覧会だったとしたら、もう20万人の人しか入れることはできないという、最初からそういう設定になるわけです。ですから、小野田さんがおっしゃったように、1時間に何人というような、そういう人数制限の話になってくるので、映画とか演劇とかであれば定足数みたいなもので収入の計算をやっているのかもしれませんが、いずれにしても美術館も収入は減るわけです。そうすると、それに見合うものという、入館料を上げざるを得ないと思います。

ですから、いずれ演劇とかと同じぐらいの金額、あるいはオペラとか、ああいう金額になってこざるを得ない。5,000円とか、ひょっとしたら8,000円とか、そんな時代が来てほしくないですけどね。それは観客を仕分けすることになっていくわけです。多くの人たちに親しんでもらうのが本来は博物館、美術館のあり方ですから、そうはなってほしくない。博物館はそもそも無料なんです。無料にするというのが博物館の大原則なんです。

服 部 博物館法ではそうなってますね。やむを得ない場合だけランニングコストとしての入館料を徴収すると。

島 やむを得ない場合は、です。実際ロンドンのナショナルギャラリーはコレクション展は無料なんです。イギリスはどれだけ財政が逼迫しても、大英博物館は無料なんです。特別展というのは、日本でいうととても大きく感じられますけれども、ヨーロッパの美術館の特別展というのは、展示室の一角でちょっとやってるだけなんです。ですから、コレクション展を見るだけで十分満足できる。

服 部 日本人も海外の美術館に行くと、大体コレクション展を見ますね。

島 ですから、やはりフランスのルーブル美術館なんかは料金を取りますけども、とりわけイギリスは、これは今でも僕は本当に不思議だと思うんですが、入館無料で運営されている。本来だったらそうあるべきで、日本は残念ながら入館料を取っている。そういった課題がある中で、今まさに料金が上がってくる可能性があります。どこまでの価格でぎりぎり許容できるのか、あるいは大人は上げるとしても、少なくとも子どもたちは上げずにおくとか、あるいはもっと無料で近い料金を設定するとか、そういった工夫が必要になってくるのかなと思います。

服 部 少し前に、新聞社の事業部の方も登壇されるシンポジウムがあって、新聞社の事業部の方が言っておられたのは、子どもを無料にするというのは行政的な意味であって、新聞社の事業としては別にそうする必要はないとか、むしろ事業としては子どもからお金を取りたいんだから、子どもを無料にする分の差額は行政で払ってほしいというようなことを言っておられてまして、そうすると今度は行政側で予算が余計に必要なってきます。

学生の皆さんにはあまりイメージが浮かばないかもしれないんですけど、予算1億円の展覧会ということは、1人1,000円ずつ入館料を払ったとして10万人ですよね。だから、3億円かかる展覧会だったら30万人入らないと黒字にならないということですよ。

ところが、一方でこのコロナ禍で人数制限がすごくかかって、すいた中で見る展覧会って何て良いんで

れているわけですが、そういう教育機関との連携とか、あるいは地域との連携について、そういうことを積極的に近年行ってきた博物館にとって、今回のことはどういうことだったのでしょうか。もちろん、展覧会活動ができない場合、学校の団体があまり来なくなったのかなということくらいは想像がつくんですが、あるいはボランティアさんであったりとか、いろんな方々との関わりが、そういうことがどうなっていったのかなということ、あるいは、現状どれくらいそれが再開できているのかというのも気になります。あと、加えて大学との関係で言うと、博物館実習のような形で大学の学生は随分お世話になって、受け入れていただいて、貴重な学びの機会を与えていただいているわけですが、そういう活動はどんな感じだったのかとか、逆に博物館から大学とか研究機関などに講師とか研究員として関わるアウトリーチ活動にも何か制約があったのか、その辺の変化みたいなことをお話したいと思いますが、いかがでしょうか。

島 学校の団体鑑賞に関しましては、緊急事態宣言を受けて例えば金沢市内の学校以外は受け付けないというようなことを一時やりました。

富山も近いので、富山から来たいという要望はあったんですが、基本的には、金沢市内の小中学校からの団体客のみとしました。ところが緊急事態宣言も長くなったものですから、断る断らない以前に、県外からもとにかく見に行きたいという要望がありました。そうすると、団体で自発的に来られてしまうんです。

服 部 事前に受付をせずに、実際に来られたということですね。

島 ただそれは事前にある程度は把握ができるので、何かしら対応せざるを得ないんです。いきなり100人、200人の人が来てしまいますので、その場合は荷物置き場の確保や館内での行動についてお願いをするなどが必要になります。21世紀美術館の特徴的なところですけども、有料で入る場所と、無料で見られる場所があり、無料で見られる場所にも意外にたくさん作品がありますので、来られた場合は分散鑑賞をお願いしました。100人で来られたら50人ずつ、50人がまず有料ゾーン、残りの50人の方はまず屋外を含めて無料ゾーンを自由に見ていただくという時間を取っていただいて、途中で入れ替わってもらいというようなことにして、鑑賞時間を40分か50分ぐらいで分けて、それで密を避けるような工夫をしました。

それから博物館実習ですが、これは大学生が美術館で研修をして、そこで単位を取って、最終的に学芸員の資格を取ることにつながるもので、美術館で受け入れるのですが、これは予定どおり開催しました。去年も開催しましたし、美術館に問い合わせたら今年もこの夏に、予定どおり開催したということです。ただ、館によっては受け入れてない館もあったようで、21世紀美術館での希望者がいつもよりも多かったと聞いています。応募してきた学生さんが多かったということで、可能な範囲で受け入れて対応をしました。ただ、その際にも通常だったらワークショップ的なことを一緒に大人数でやるところを、半分に分けて、半分は館内の視察で時間を使って、残りの半分为交代でやっていただくとかというような工夫もやったということです。

服 部 甲南大学でも、美術コースの学生は横尾忠則現代美術館に受け入れていただいています。今年はたまたま例年より少なく、4人だったんですが、それでも2人ずつ2回に分けて受け入れていただきました。私たちとしては受け入れてくださって非常にありがたかったのですが、館の立場からすると、同じことを2週間にわたって2回しなければならず、それは大変ご負担をおかけしたんだと思います。このような中でも、博物館の皆さんが大学教育に携わってくださっているということ感謝の気持ちでいっぱいです。ほかの館のご事情はいかがですか。

小野田 スライドを出してください(図10)。先にお話ししやすいほうからすると、博物館実習については、令和2年4月13日付の文化庁通知が来ています。博物館実習はできるだけ受け入れてください、というものでしたが、どうしてもできないときは大学に肩代わりしてもらっても良いという内容でした。

去年度の場合でいくと、週5日で受け入れてまし

た。従来どおりであれば、15人1班編成で、1週間ずつ2週間、計30人受け入れているのですが、あまり密になるのもという問題意識もあり、少なめに募集しました。神戸市の博物館なので、神戸市の方が優先というのと、他府県の大学に行かれている方については、検温とか健康観察を十分にお願しました。今はもう大学の授業でも普通かもしれませんが、在宅実習も1日設けました。在宅のときには課題を設定して、去年は「博物館の展覧会ができるまで」という題目で、自宅でその構想を練ってくださいというものです。

3年度につきましても、やはり密の問題を考慮しました。3年度は緊急事態宣言等が長引きましたが、その一方で、ほかの博物館ではたくさん受け入れられたという話を聞きながらも、8人の2班体制で取り組みました。この状態が続いたら、また厳しいかもしれませんが、従来30人のところが半分だけとなるでしょう。歴史系の学芸員志望の方がここにいたらごめんなさい。

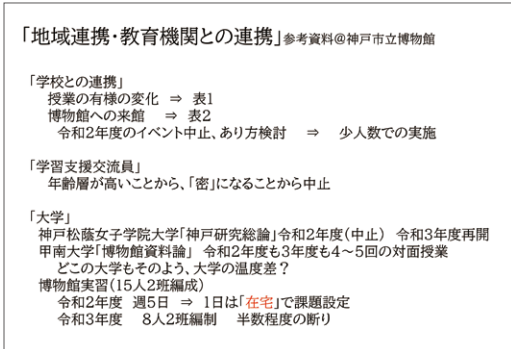
以上のような措置を講じざるを得ませんでした。加えて、当館が実習を行ってきた部屋が狭かったので、先ほど説明した講演会を行う講堂を活用したのですが、それでもなかなか少ない人数でしか実施できませんでした。そのために甲南大学の学生の方にも申し訳ない事をしました。

もう一つ、学芸員のアウトリーチに関しては、松蔭女子学院大学と連携を組んでいまして、神戸研究総論という講義を大学の先生方と一緒にさせていただいています。15講座のうち半数ぐらいは当館の学芸員が担当していますが、令和2年度については中止、令和3年度は実施となっています。

甲南大学にも、博物館資料論で私が出講していますが、令和3年度はこちらに寄せていただいたのは、担当10コマ分のうち、4～5コマ分ぐらいだったでしょうか。我々としても実際の現場での話を、やはり対面でし、学生の反応も見たいというのが本音で、ここ12年ぐらい寄せていただいているモットーとしているんですが、それができませんでした。去年だと7月ぐらいに初めて対面の授業で会って学生の顔を見られたことの安堵、学生さんも互いに会えて非常に喜んでたということを記憶しています。

先ほど、来館者の関係というお話がありましたが、博物館の教育普及活動の歴史から申し上げますと、学校が週5日制になった段階から、小学校と中学校との連携授業、特に当館で持っているザビエル像であったり銅鐸というものをテーマにしながら、社会科の授業であったり、図工科・美術科の授業に力点をしています。

コロナ禍がまだあまり影響がなかった元年度は、140校を超えていました。当館では社会科と美術科の教員に教育委員会から来てもらっておりまして、多い時は130校以上、普段でも120~130校に授業に



神戸市立博物館「地域連携・教育機関との連携」 図10

出かけるというのが従来の数字だったのですが、2年度については7割ぐらいまで落ちました。今年度については7月末までの統計しかありませんが、やはり数字が落ちてます。特に2年度については5月末まで一斉休校となりましたので、それに伴って学校現場でも苦勞して時数を確保しようということもあったと思います。

数字は非常にものをいうわけでありまして、元年度については半年間休館しておりましたので、11月2日の開館後を見た場合、幼小中と見ていただきましたら分かりますように、5か月で1,654人の中学生と、861人の小学生の来館がありました。それが、2年度につきましては桁が一桁違うんですね。やはり学校は、先ほど申し上げた休校措置によって、カリキュラムをどんどん詰め込んでいくということが生じました。それとともに、集団行動をしようとしても、電車で神戸の三宮まで来て、駅から博物館までやって来るという活動は多分ためらいがあったことが、数字に表れているのだと思います。

ましてや今年度も、前半はずっと緊急事態宣言が出っ放しでしたので、昨年と同じような状況です。これも致し方ないことだと思いますし、子ども向けのイベントも基本的には縮小しており、「できるだけ密にならないように、本当に数人程度で開催しましょう」という形で取り組まざるを得ませんでした。学校関係ではそういった感じでした。

亀田

当館では、学校団体は、何日の何時に何名、小学校の何年生とか、もともと予約を取っていただいて来ていただくという形になっています。中には体験学習を希望するところもありますし、展示の見学だけというところもあり、それを受け入れてやってきました。先ほどお話ししたネットでの予約というのは個人の来館者の方の予約で、団体の予約については別途電話で受けており、エクセルシートに書き込んで、何時から何時まで滞在するかを確認して、1時間ごとにその時間帯に来る人数を全部書きこんで時間ごとの団体受入れ人数を決め、それを超えた場合は、時間ずらしてもらえませんかとか、何時からなら空きがありますとか、この日はもう一杯ですとか、団体にも人数制限を行いながら対応しています。

当館自体が休館していたり、県境をまたいだ利用は学校側も遠慮されたりということで、数字を見ると確かに学校数は減ってはいますが、実は今年度については、休館から明けた時期には意外と学校団体の利用が増えました。制限いっぱいいっぱいまで予約が埋まります。どうしてかといいますと、もともとは工場や企業に見学に行かれていたところが、企業や工場などの受入れができなくなったためです。そのため、受け入れてもらえる施設を探すと、博物館だったら人数制限の枠内であれば受け入れてもらえるということで、社会科見学など校外活動をする場合の受け皿として選んでいただいていたというところがありました。

今回も昨日からオープンしていますが、その少し前から秋の学校団体の見学シーズンの予約や問い合わせが来ていますし、どんどん枠が埋まっていっているというのが現状です。もちろん学校ごとに、消毒や検温などの対応はきちんとやっていただくようお願いして、対応していただいています。

博物館実習については、次のスライドのように（図11、12）、当館では毎年8月に受入れをしておりまして、リニューアルがあったため少し人数を絞って、15名受入れということでやっていました。リニューアルもあるので8月終わりぐらいに実施するつもりだったのですが、コロナの状況になったため、令和2年度については、対面でやれるのか、それともオンラインでやるのかということを、検討しながら準備をしてきました。

結果としては、単位や4年生の卒業を考慮した上でぎりぎりまで期限を延ばして、通常8月に行うところを11月に実施することにして受入れをしました。最終的には、その段階でできるだけ対面でやりましょうということになり、検温をしていただいたり、密にならないよう注意をしながら実施していましたが、実はその途中、3日目に実習生の1人が発熱しまして、かなりどきっとしました。3日目の朝に連絡があり、その日の実習は予定どおり行っただけですが、いくら対策は取っているといっても同じ部屋の中に学生さんみんな一緒に実習をしていたので、結局翌日から実習は中止ということにしました。（追記：結果的には、発熱した学生さんはコロナではありませんでした。）

5日間の実習だったんですが、3日目までやって残りは中止ということで、最終的に単位や修了要件はどうしたかといいますと、もともと当館の実習は、いつも最後に何か課題を出して、その発表やレポート提出を実施していたので、中止になるまでに出していた課題を在宅でやってもらい、その提出をもって修了ということにしました。原稿作成を在宅で行ってもらい、修了証を発行しました。

本年度も、対面にしようか、オンラインにしようかと考えましたが、いくら待っていても決断は難しいので、わりと早い段階で完全オンラインを試しにやってみることにになりました。時期は通常と同じ8月末にして、通常でも行っているようなレクチャーについてはZoomで行い、展示施設見学については、担当者が施設や展示室の動画を撮影しておいて、それをYouTubeで配信しました。

実習については、大きく分けて二つぐらいパターンを準備しました。博物館のウェブを活用して、ウェブを見て当館の情報を全部チェックをしてくださいというような課題があったり、ウェブを参考にしながら何か課題に取り組んでもらうというようなことをしました。

あとは、事前に課題を出して、例えば何かテーマ決めて展示パネルを作ってみてくださいとか、広報のためにカレンダー、ポスターの製作をしてみてくださいという、結構学生さんには慣れない課題も出したりして、大変だったと思うのですが、そういった課題を発表してもらい、学芸員がこうしたほうがいいんじゃないかというコメントを出して、もう1回修正して提出してもらおうということで、実習としました。

通常の実習では、毎日学生さんに日誌を提出していただいて、学芸員が印を押したりコメント書いたりして返していると思うのですが、それを添付ファイルにしてメールで送ってもらい、学芸員もそのファイルに書き込んで、またメールで送り返すという形で行いました。担当者は結構大変だったと思いますが、こういう形で試しにオンライン実習をやってみました。

大学との関係：博物館実習

- 2020年度 対面とオンラインの両者を検討
→単位のとれる最大限の時期をずらして対面実施
- 期間: 2020年11月21日(土)～25日(水)
- 受け入れ人数: 15名
- 方法: 感染症対策をとりながら対面で通常開催
- 実施3日目に実習生の一人が発熱
→4日以降の実習を中止
最終プレゼンテーションの原稿作成を在宅で行い提出することで、修了証を発行した

大学との関係：博物館実習

- 2021年度 対面とオンラインの両者を検討
→早い段階で完全オンライン実施
- 期間: 2021年8月23日(月)～27日(金)
- 受け入れ人数: 15名
- 方法:
 - ・講義: Zoomでレクチャー
 - ・展示・施設見学: 担当者が動画撮影しYouTube配信
 - ・実習: 博物館のWebを活用
(Webサイトのユニバーサルデザインチェック)
事前課題を発表、講評とコメント、修正
(展示パネル、カレンダーポスター製作)
 - ・実習日誌の提出・返却: ファイルでメール送信

上: 図11 / 下: 図12 滋賀県立琵琶湖博物館 博物館実習

実際の実習、博物館に来て本物の標本や資料を扱ったりすることが、本当は一番よいのですが、学生さんの中には、ほかの博物館では実習が中止になってしまい、実習できなかったという人もあり、やってもらってありがたかったという意見もありました。一つの試みではありましたが、オンライン実習を試行してみた結果はこんなところですよ。

服部 皆さん大変ご苦労されて、学生を受け入れてくださってるということが、とてもよく分かりました。

一方でやはり、現地に行って、ほかの大学の同じ課程を学んでいる学生たちと出会うこととか、あるいは大人の方たちの中で働いてみるとか、そういうことは学生が大きく成長する機会でもあるので、なかなかオンラインだけでは難しいところもあるんだろうなということも感じます。

時間がかかり経過しておりまして、いろいろもっとお聞きしたいこともあったんですが、あともう一言だけお願いしたいと思います。どうしても厳しい話というか、しんどい話がいろいろと出てきたわけですが、ここからは、ちょっと未来に向けて、博物館を明日につなぐ、未来の可能性に考えるというタイトルにもなっていますので、何か未来に向けてポジティブなことも考えたいと思っています。今後、このコロナ禍の中で、今回のことから何を学んで、博物館はどう変化していくのか、それは博物館行政の問題でもあり、あるいは鑑賞者自身の問題かもしれません。博物館はどういう方向に向かって行くのがいいのか、文化的には今回のことから何を学ぶことができて、何かポジティブな変化はあったのか、一言だけそれぞれお伺いして、あとは質疑応答に入りたいと思います。

島 二つほどお話ししたいと思います。

一つは、展覧会の中止もありましたが、イベントの中止も結構あり、例えば講演会とかシンポジウムも、もちろん中止になりました。その他にも、金沢 21 世紀美術館は、主催事業も共催事業も含めて演劇とかダンスパフォーマンスも結構あったんですが、それもやはり半年以上の期間中止になりました。

その中で、私自身も小さな「シマ缶と一く」というのを担当しておりまして、コロナ前にすでに数回やっていました。島館長のトークで「シマ缶と一く」。ちょっと赤瀬川原平の缶詰に引っかけてるつもりなんです、それが分かる人がいたらすごいと思いますが、それを最初は対面でやっていたんですが、コロナ禍に入ってしまったのでオンラインでの実施にしました。

僕は館長室にいて、ゲストは東京にいて、オンライン上で一緒になって、それを視聴するという形です。通常は美術館に小さなホールがあって、そこで 80 名ほどの観客を入れてやってるんですが、オンラインによってふだんは金沢に来られないけれども興味があるという人が聞いてくれたんです。僕がもともと大阪にいたものですから、大阪の友人も後から聞いたよと教えてくれたりで、そのときにオンライン配信を請け負ってくれた業者さんに話を聞いたら、通算で 200 人の人が聞いてくれたというのです。ですから、対面だったら 80 名のお客さんしか聞けないところを、倍以上の方が私のトークを聞いてくれたということで、これはある意味ではこのコロナ禍によるオンライン活用の成果です。これは多分技術的な問題もあって昔ではなかなか簡単にできなかったんですが、今は Zoom などオンラインツールが幾つかありますよね。その技術を使って、比較的容易にそれができる。これは今後も継続してやっていっていいんじゃないかと思っています。

著作権の問題とかクリアすべきことはいろいろありますが、こうした動画がアーカイブ化されていくと、

その美術館の歴史にもなりますし、登場してくれたアーティストが例えば非常に重要な人であれば、それ自体が非常に貴重な資料になっていきます。美術館などの文化施設においては、そういった成果の蓄積が自動的に行われることができる。将来的にそういったものに興味がある方がアクセスできるということになれば、それは一つのポジティブな要素として考えていいんじゃないかと思います。

もう一つは、どうしても日本の場合は企画展とか特別展に目が奪われがちなんです。メディアが大量宣伝する展覧会に皆さん足を運ぶことが多いんですが、日本の美術館も大体 40 年近くの歴史がありますので、その間に蓄積してきたコレクションをやはり有効活用しようではないかという気運がかなり高まってきたのではないかと思います。

自分の家の近くにある、自分が住んでいる自治体の近くにある美術館のコレクションって、意外に知られてないところがあるんです。ですから、そういったものを改めて見直す機会になりました。常設展示とか、コレクションを活用した展覧会というものが、今後より積極的に行われていくべきではないのかと思っています。

服部 博物館の基本はその収蔵品であるということに、改めて立ち返ることができたということですね。

亀田 今、島館長がおっしゃられたとおり、今回のコロナ禍でオンラインの活用が一気に深まりました。実際に来館して施設を利用していただいたり、いろんな行事に参加していただけないので、それ以外の方向で何とか博物館を利用していただけるよう模索していったわけです。当館は、オンラインでの発信はちょっと遅れているところがあったのですが、北海道博物館が「うちミュージアム」という取り組みを全国的に始めまして、当館もこれに参加しました。これは、家でいろいろなコンテンツをダウンロードしたり、コンテンツを見て楽しめるというもので、全国のいろいろな博物館が参加しました。

当館では、例えば展示の補助ツール、ワークシートのなものなどは、展示交流員さんに考えてもらいました。展示交流員さんは、ふだんから展示室で展示のアピールをしているので、先ほども言った業務継続ということもあり、コンテンツをつくって、うちミュージアムや、あるいは別の形で動画などを配信しました。交流員さんには、それぞれ個人やグループで考えてもらい、いろいろなコンテンツをつくって展示の魅力を発信してもらいました。また、博物館を主体的に利用できる制度として「はしかけ制度」というものがあるのですが、そのはしかけさんたちが、ふだんからもともと持っていたアイデアやツールを使って、うちミュージアムのサイトで発信していくといったことも行ってくれました。

これらは、日頃からの活動が大いに生かされたもので、博物館に関わる多様な人々の、ふだんからの底力がすごく生かされた場だったと思います。

もしよかったら、うちミュージアムで検索したり、当館のホームページの中からも見ていただけると思うので、ぜひ見ていただけたらと思います。本当にいろいろなものが載っています。

オンラインによる博物館利用が、今後ポスト・コロナでも重要なことだと思っていて、展示室に来館するだけではなく、体感、展示観覧だけではない博物館利用の拡大といいますか、むしろそれは博物館の役割の再確認だと私は思っていますけれども、そういったものにつながっていくんじゃないかと思っています。

未来に向けては、そういったオンラインと対面での博物館の活動について、うまく両方のメリット、デメリットを生かした形で使い分けていくというのが有効なのかなと思っています。その場合に課題になってくるのが、人のコミュニケーションですね。両者の相互作用で生まれてくるようなものを、バーチャルな世界でどうつくり出すのかというのは、これからよく考えていく必要があると思います。あと、これは特に当館の場合、先ほども言いましたように、フィールドに出る、現場に行くのが本物の博物館を訪れることですよ、建物の博物館というのはその入り口にすぎませんよ、という理念でやっているんで、バーチャルなものをオンラインで見てもらったところから、実際の博物館の本物の資料、標本の魅力をどう引き出すのかということに加えて、そこからさらに本当の現場、フィールドに関心を持ってもらうところまで、どうつないでいくのかをこれから考えていく必要があると思っています。

小野田 当館は遅れてるほうだと思うんですが、多分これからは、予約システムとか、キャッシュレスとか、人と人との会話がなくて血が流れてないような気もしますが、そういう傾向になってくると思います。先ほどお話にあったような、おうちミュージアムでコンテンツを使いながら体験するということは、もう時代の流れとしてそうなるでしょうし、それに柔軟に対応していかなければならないでしょう。

ただ、人文系の博物館に勤めている者として、やはり本物の持つ魅力というのは何ものにも勝るということは強調したいと思います。これは私だけが感じていることではないと思うんです。実際に、博物館に足を向けてもらって、本物を見たときの感動とか、それを見て何を学習していくのかというのが大事で、多分それは我々に課せられて一番の大きな役割だと思ってます。学生さんもおられるので、実際のものを見るというのはどれだけ意義のあることか、現場を見ないと何も分からないということ、やはり現場を知ってる、知ってない、ものを知ってる、知ってないというのは、学びの中でかなり違うと思うので、その辺については今後も、たとえコロナ禍であっても心がけて活動していきたいというのが私の意見です。

服部 ありがとうございます。大学の授業での話になるんですが、オンラインで美術の作品を見もらう授業をやったときに、大きな教室でスライドで見ている時よりも、すごくよく絵が見られた、自分のスマホで見られるので。その絵を細部までしっかりよく見た、こんなにしっかり見たことは初めてで、ぜひ美術館に行ったら本物が見たくなったという学生さんの意見が結構ありました。その絵の情報がオンライン上にありながらも、やはり現場で現物が見られる場所が保障されるってすごく大切ですよね。そのことも今回また改めて分かったことだなと思います。

皆さん、ありがとうございます。ちょっと時間がかなり押しているんですが、少し質疑の時間を取りたいと思います。指定討論という形で、まずは理工学部長、今井先生から何か簡単にコメントとか質問とかありましたら、お願いします。

今井 私から簡単に。2021年度はウィズコロナとなる中で、今、10月に宣言が解除になりました。このままウィズコロナの状況でいくというような感じがするのですが、来年度、2022年度はそれぞれどんなことをする、あるいはこんな見通しになるという、来年度のことをちょっと聞かせていただけますか。

島 今のところ、展覧会を予定しているものがあることはあるので、それを開催する予定ではいるんですが、中止になるかもしれません。海外とのやり取りもしていますし、新聞社等とのやり取りもありますので、そこがちょっと読めないです。

いまだに、あと1か月、2か月ぐらいで方向性が出ないと、来年度のスケジュールが組めないという状況が、実は国立国際美術館だけではなくて、国立西洋美術館から巡回する展覧会もあるので、当館が駄目だということは西洋美術館も駄目になりますので、そういうような面では、海外展に対してはちょっと不安材料があります。

一方で国内の展覧会に関しても、アーティストと一緒にやる展覧会がどこまでできるのか見えないところがあって、そこは若干不安の要素があり、ですから今は不安な気持ちでここにいます。

亀田 来年どうなるのか、企画展ですとか、一応通常通りのいろいろな行事を想定して準備はしていますが、そのとおりに行くのかどうかは全く分かりません。

これまでと同じような形で、恐らく万一休館や中止、延期となった場合に、やり方を変えとか、時期をどうするのかというのを多分その都度考えながらやっていくような状態になるのかなと思います。一つ、新琵琶湖学セミナーという講座を当館でやっていますが、去年までは参加者が年配の方が多かったこともあり、かなり縮小したり、一部中止したりしながら、対面を重視した形でやっていたのですが、今年度は完全オンラインにしてやってみようということになりました。

おそらく将来的には、オンラインと対面の併用という方向を視野に入れて、今年はまず取り組んでみるという形になるだろうと思います。

ですから、先ほど言ったオンラインと対面とをどういうバランスでやっていくのかに取り組み始めるのは、おそらく来年ぐらいかなという感じはしています。

小野田 不要不急問題ですね、「博物館は不要ではない」。その中で、従来型の活動はもちろんずっと継続して行っていくべきであると私は考えてます。

ただ、来館者も不安を感じているので、来年の2月から開催する展覧会は、やはり時間制を導入せざるを得ないと思っています。博物館の場合、美術館でもそうだと思いますが、人の流れは時間制を導入しても単純に割り切れないんです。どうしても人間の活動によるので、晩に開けても人は来ないわけです。やはり11時頃から1時から2時の枠に人が集まることが想定されます。それでも、やはり時間制を導入して安全に、ウィズコロナ、アフターコロナなのかポスト・コロナなのか分かりませんが、やはり人の安全を図るためには時間制を導入せざるを得ないのかなと思います。多分ポスト・コロナでも、時間制が導入されるのだと思います。

服部 ありがとうございます。文学部長の西先生、いかがですか。

西 さきほどお話が向かいかけたオンライン展示の可能性について、お三方の「感覚」というか「信念」を伺いたいと思っていました。けれども時間の都合もありますので、島先生に続きの部分を伺いたいです。オンライン化のお話をされたとき、イベントに関してだけおっしゃったのですが、やはり展示となると全然別ではないかとも思われます。「本物の代え難さ」がある中での、オンラインの展示の可能性について考えてらっしゃることがありましたら、お願いします。

島 そうですね。やはり、実際の作品の展示ということであれば、やはり足を運んでいただく以外に方法はないかなと思います。映像とかを見るだけではちょっと物足りないものになってしまいます。

ただ一方で、VRとかAIとか、そういった新しい機器を使う場合には、例えば自宅でそういうセットを準備しておいて、パソコンでつなげさえすれば、特別なアクセス権をその中に付与して、美術館でそういったソフトというか、アーティストがつくったものを用意しておいて、国際美術館が発信するVR作品として展覧会を構築する。そういう場合は場所は要らないんですよね。国際美術館でスタジオをつくって、アーティストも一緒に取り組んでコンテンツをつくって、それを特別に配信するというようなことは、ある意味では可能ですよね。

そういった可能性は実際にはできるような気がします。それは演劇的な要素もあるかもしれません。映像作品になる可能性が非常に高いので、その可能性はもう訪れてきてるかもしれません。

服 部 では、会場から質問をお聞きます。

質問者 1 新聞の購読者が減るなかで、新聞社の事業部が展覧会を企画するということは、これからも続いていくのでしょうか。

島 そうですね。新聞だけではなくテレビ局も関わるという場合が最近は増えてきており、むしろテレビ局が主体でやってる場合もあります。それから、展覧会の企画会社のようなところが、また別な形で出てくる可能性もあるかもしれません。

ただ、今は多分若い方は新聞は読まないし取らないしということはあると思いますし、そういう意味での斜陽産業だろうとは思います。とはいえ、日本はまだ新聞自体が発行されてること自体が驚きかもしれません。海外では新聞配達というのはないんですよね、たしか。実際に新聞スタンドまで行って買わなければいけないというのは、現実的ではない状況ではありますので、まだまだ日本では新聞というものが身近なものとして位置付けられているんじゃないかと思います。ただ文化事業部という組織が新聞社の中で今後存在感を失っていく恐れはあるかもしれませんね。そのときに、それに代わる企画を立ち上げる人たちというのは、ひょっとしたら変わってくる可能性はあるような気はします。

質問者 1 そのような会社はすでにあるんですか。

島 新聞社の下請け的なかたちで企画を受け持つ会社は幾つかあると思います。ですから、そういったところが海外とのネットワークを通じて活動していけば、海外とのネットワークを使った大型展示というのができないわけではないんですが、ただどこがやるにしてもリスクというか、このようなパンデミックが起きたときにはリスクが非常に高いので、入場料収入の問題とか、入館料の設定というのが変わってくるだろうという気はいたします。

質問者 2 貴重なお話ありがとうございました。大変勉強になりました。

一つ、皆様に質問させていただきたいんですけども、本日のお話を伺っておりまして、コロナ禍で人のつながりとかが失われたんじゃないかというお話もありましたが、オンラインコンテンツの拡充によって、

そうした人とのつながりというのはわりと保てていたように思いました。反対に失われたものというのは、個人の鑑賞体験だったり、そうしたことのための時間が失われたんじゃないかということを思いました。そう考えると、美術館や博物館でも失われたものというのは館内のつながりというよりは、積極的に所蔵品の発信とかオンラインコンテンツによる発信などによる普及活動が求められたときに、時間のもつ役割だったり、現在の立ち位置を吟味するような、そうした時間がむしろ減ってしまったのではないかと思いました。先ほど小野田さんのお話にもありましたが、行政だったりとか、あるいは世間から求められるような現在の役割等を、学芸員の皆様がどう考えておられるのか、もっとこうしていきたいというような、そうした外的な要求とのずれということについて、今の時点で感じているということはありませんでしょうか。

服 部 ありがとうございます。とても鋭い質問で、どうしても行政やメディアのプレッシャーの中で、こういう対応をしなければいけないとか、急な判断をしなければいけない場合がとても多かったと思うんですが、そんな中でそれぞれの館で、こうじゃないよとか、いろいろもっとこうしたかったのに、というようなことを含めて、今のご質問にお答えいただければと思いますが、いかがでしょうか。ちょっと皆さん頭抱えておられるようですが。

小野田 深い質問で、よく状況をご理解されていると思います。行政の話はあまりしたくないのですが……。

コロナでよかったということはないんですけど、大規模な海外展が出来なくなって、その代わりに新たな視点で館蔵品を見つめなおす機会ができたのは大きかったですね。「コロナ禍で、人と人との結びつきが希薄になっているよね」という、学芸員の発想から端を発したのですが……。学芸員には「常日頃から資料を見なさいよ、その状態を把握するのですよ」と言っているのですが、別の意味で「つなぐ」を念頭におき、異なる視点から資料を見られたというのは、学芸員の立ち位置の再確認といえるでしょうか。お客さんはもちろんあまり入っていないので、行政的に考えるとバツだと思うんですが、有意義な時間であったとは思います。

もう一つ質問に挙げたオンラインの関係について、当館のフェイスブックをご覧になったことはあるでしょうか。コロナ禍の中で、かなり力を入れて発信したつもりです。展示作業の風景とかは、ふだんはフェイスブックとかには上げないんですが、わざわざ、美術品輸送の専門業者さんの許可をいただいて、こんなことをしているということをPRしました。さらに休館中の様子なども公開しました。そういった取り組みとしては、吹田にある国立民族学博物館とかの収蔵庫を見せる、大阪市立美術館の展示ケースだけ置いている。そのような発信も必要でしょうか。

まさに裏側を見せるという方向性からはオンラインも活用しながらできるのではないかとということと、先ほど言ったように自分の担当資料を見詰め直し紹介する機会の創出にもなるのではないかと考えています。

亀田 確かに、いろいろなニーズとのずれみたいなものもあります。博物館が展示をしてない、休館しているという、それなら暇でしょうというイメージで受け取られるのですが、そんなことは全くなくて、今おっしゃられたように資料の整理をしたり、あるいはオンラインで発信していくためのいろいろなことを新たに取り組み始めたり、全く暇ではないんです。

だけど、どうしても展示してなかったらイコール休業状態と思われてしまうのがちょっと残念なところで、もう少し博物館の展示以外のいろいろな活動も、もっとアピールしていかないといけないなとすごく思います。

オンラインの話も含めて、いろいろなマイナス部分もあるのですが、逆にそれをきっかけに、プラスにしていくことも必要とされていて、展示が休館中だったら、それ以外にこういう活動をしていますということをアピールしていくことも必要と考えています。オンライン配信の部分は当館も必要だと思いながら、なかなか実際には取り組めていなかったのが、嫌でもぼちぼちと取り組まざるを得なくなり、今まで全然そういうことが得意ではなかった人もやらざるを得なくなったので、それならばもう少し館全体で整理して、方針をきちんと考えていかなければという気運が出てきているかなと思っています。それをいかにうまくプラスに転換していくのかということが、これからは大事と思っています。

島

コロナの問題があってもなくても、ちょっと思っていたことが一つあって、この機会にお話ししたいんですが、以前所属してた金沢 21 世紀美術館みたいな美術館は、何もしなくても人が来てくれるんです。新幹線が開通して東京と行き来ができるようになって、東京からどんどん人が来るんです。

現代美術館でああいう美術館というのは、多分世界であそこしか、世界とまで言えなくとも、日本では金沢しかないと思います。それ以外、国立国際美術館を含めて現代美術を所蔵している美術館というのは、それほど人は来てくれないんです。

だから、国立国際美術館でもロンドンのナショナルギャラリー展もやったりしながら、その際に一緒にコレクションも見ていただいて、現代美術に親しんでいただくという活動はしています。それでも、美術館の所蔵品というのは意外に知られてないというのは僕の通常感覚なんです。国立国際美術館というのは、特に地名が入っていないので、大阪以外の方には国立国際美術館ってどこにあるのか分からない、多分大阪でもそうかもしれませんが、そういったことがあって、仮に美術館があるということが分かっても、そこにどういう所蔵品があるのかというのは、実は意外に知られていません。

しかも、展示室に出ている作品はごく一部にすぎないんです。場合によっては 1% に満たない場合も、館によってはあると思います。ですから、その館は何を所蔵していて、何を志向して、学芸員は何を考えて、どんなことにしようとしているのかということは、ほとんど知られていないと言っていいんです。

ですから、今回のことで改めて学芸員の人、あるいは美術館を支えている人たちが、その館のあり方というものを見詰め直す機会にはなったと思います。特にコレクションを持っている美術館に関しては、そのコレクションをもう一回見つめ直して、それを再構築していくという作業を多分始めていると思います。実際に例えば、つい最近のことですが、愛知県美術館と富山県美術館と横浜美術館と、この三つの美術館がコレクションをまとめて「トライアログ、語らう 20 世紀アート」という展覧会を開催したんです。これはムンク、ピカソからリヒターという、どちらかというと欧米中心のコレクションなんです、日本の美術館にそれなりのコレクションの蓄積があるということが示されました。

ふだんは、そういったコレクションをまとめて見る機会がなかったのですが、そのようなコレクションをまとめて構成することができた一つの良い例だったと思います。

ただ、実はこのコレクションにも大きな問題が一つありまして、白人男性による欧米の美術、さらにもっと極端にいうと、ニューヨーク近代美術館がつくった近現代美術史に沿ったコレクションが基本なんです。

なぜ問題かという、欧米以外に視野が広がっていないという点が、国公立美術館のこの 40 年余りの

歴史の反省点だと僕は感じています。女性作家は、無意識的に私たち自身が排除してきたということがあのような気がします。ちなみに、このトライアログ展には 70 組の作家が出ているんですが、女性作家は 6 人だけです。1 割にも満たないという状況なんです。実はこれは大学の美術教育のあり方にも問題があるような気がするんです。

例えば、日本の大学の美術史の授業、博物館系の授業でもそうだと思うんですが、いや、もしかすると博物館系はちょっとあるかもしれませんが、例えばアジアの近現代美術を教える先生とかは、ほとんどいないような気がするんです。

ですから、そもそもこの欧米白人男性中心主義が検証されることがなかった。それを見直す姿勢というのは、今後やはり必要になってくるのではないかと思います。話はちょっとずれましたが、要するに今回のことは、いろんな形でコレクションを見直すきっかけに、大きなきっかけになったと思います。

服部

コレクションをまとめてみたからこそ分かってきた問題点ということですね。ありがとうございます。

まだ御質問されたい方もおられるかと思いますが、大分時間も過ぎておりますので、これで終わりにしたいと思います。まだ会場にしばらく私たちおりますので、もし御質問があれば、直接お聞きになつてください。

皆さん、長時間ありがとうございました。3 人の先生方、長時間どうもありがとうございました。

では、理工学部長の今井先生より、最後の御挨拶をお願いいたします。

今井

本日は 3 人の先生方、どうもありがとうございました。

理工学部長の今井でございます。今日はこの、甲南大学開学 70 周年シンポジウムということですが、学芸員課程を持っているのは文学部と、それから理工学部でして、私は、理工学部長ですけれども、文学部長の西先生と、私も学芸員養成課程に関わっている教員でございます。大変興味深く、ありがとうございました。

70 周年ということで、少し甲南大学の歴史も入れて述べよという上からの話もありましたので、少しだけ本学の歴史を話させてください。西先生とかぶらないように。

実は、2 年前に本学は 100 周年を迎えました。その当時は大学でなくて甲南中学校で、その後、今から 90 年以上前なんです、7 年制の甲南高等学校ができました。

そのときに文科、つまり文系の生徒さんが 28 名、それから理科、今でいうと理系ですけど、25 名で発足しています。ですので、甲南大学というのは 90 年以上前から、文系の学生さん、生徒さん、それから理系の学生さんが一緒になって発足したという、そういう長い歴史になります。

当時ですけども、90 年ぐらい前で非常に古いんですが、校舎の中には大きな食堂がありまして、正午になりますとベルが鳴って、全員の生徒さんが一緒に食事をとった、教職員もその食事の中に分散して入ったと言われています。

皆さん、ハリーポッターという映画、御存じでしょうか。 hogwarts の魔法魔術学校の大広間で、生徒さんがみんなで食事をする場面があると思うんですが、そんなイメージで、甲南では 90 年以上前、文系の学生さんと理系の学生さんが一緒に食事をして、いろんなことを語らっていたということです。

この hogwarts の魔法学校の大広間というのは、実はオックスフォード大学のクライストチャーチカレッジの大広間を撮影に使っているんですけども、当時、本学創立者である平生 釦三郎先生は、海外に行っていますので、イギリスのそういった様子を見て、こういうのいいなということで、多分本学もそういった形で教育を始められたんだと思います。

そういう訳でして、甲南大学は理工学部と、それから文学部に博物館学芸員課程がありまして、本日のこのような公開シンポジウムを毎年開催しております。残念ながら、昨年度は開催できなかったんですけども、本シンポジウムのオーディエンスとしては学生さん、特に学芸員を目指しているような方をメインにしております。そういう学生さんたちは、ミュージアムを表から見るだけではなくて、バックヤードからも見るわけで、バックヤードで見たような話をこのシンポジウムで語っていただいて、実はミュージアムってこうなんだということをこのシンポジウムでお聞かせいただければという趣旨で、今日で 5 回目になります。また来年もこういったシンポジウムを企画していきたいなと思っております。

簡単ですが、本日はどうもありがとうございました。

服部 今井先生、ありがとうございます。

それでは、今日のプログラムは、以上とさせていただきますと思います。皆さん、お手元にアンケート用紙、オンラインで回答できるアンケート用紙が入っておりますので、ぜひアンケートに御協力いただければと思います。改めまして、3 人の登壇者の先生方にもう一度温かい拍手をお願いいたします。ありがとうございました。



KONAN UNIVERSITY